Moulud Yeslem. *The long way*

講演録

西サハラの世界史的位置を考える

——トランプの置土産を眺めつつ

板垣 雄三

2021 年 3 月 6 日（土）

オンライン講演

主催：西サハラ友の会
特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会（AJF）
科研基盤研究（A）「トランスナショナル時代の人間と「祖国」の関係性をめぐる人文学的、領域横断的研究」

■ 目次

I. 講演レジュメ資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

II. 講演「西サハラの世界史的位置を考える――トランプの置土産を眺めつつ」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

A］「西サハラ問題」解決への前進を阻んでいるものは何か・・・・・・ 8

B］ベルベル人の世界　サフラワが拠って立つ歴史的・文明的基盤・・・15

C］モロッコの変革、アルジェリアの変革、世界の変革へのヒント・・・22

D］日本社会にとっての西サハラ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

ワタン研究プロジェクトでは、人間と「ワタン/Homeland」の関係を人文学的視座からグローバルに考究しています。 2021 年 3 月 6 日、西サハラ友の会、特定非営利活動法人アフリカ日本協議会（AJF）との共催で開かれたオンラインセミナー「西サハラは誰のもの？――トランプ外交の負の遺産を越えて」にて、板垣雄三先生に西サハラの世界的位置についてご講演いただきました。その内容を加筆・修正の上、ここに採録します。

I. 講演レジュメ資料

西サハラ・オンラインセミナー「西サハラは誰のもの？ トランプ外交の負の遺産を越えて」2021/3/6[土]15：30～
主催：西サハラ友の会　共催：特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会、科学研費補助金基盤研究(A)「トランスナショナル時代の人間と〈祖国〉の関係性をめぐる人文学的、領域横断的研究」（代表：岡真理）

西サハラの世界史的位置を考える――トランプの置土産を眺めつつ

板垣　雄三

A]「西サハラ問題」解決への前進を阻んでいるのは何か

新郷啓子『抵抗の轍 アフリカ最後の植民地、西サハラ』、インパクト出版会、2019 年 11 月.

■欧米中心主義の終局　そこで再検討を迫られる思考法

▸2021 年 2 月国際刑事裁判所 ICC 襲う激震 パレスチナをめぐる戦争犯罪裁判着手決定
主任検察官交替 Fatou Bensouda(ガンビア)→6 月 Karim Asad Ahmad Khan(英国)
加盟国会議［会長 O-Gon Kwon］の選挙で［アイルランド、スペイン、イタリアの候補者を押さえ］

▸国家の裁判権免除法理と国際人権法との衝突 元徴用工の賠償請求 韓国大法院判決と日本国

▸国際法 条約・使節・公館・旅券・Capitulations(対仏 1536、対英 1579) イスラーム法スィヤル

▸主権・法人　国際司法裁判所 ICJ による西サハラの帰属根拠の調査　バイア/ザヒール

▸国際連合、国民国家の虚像　とぐろ巻く植民地主義・人種主義・軍国主義
Rogue state(ならず者国家)、構造調整、regime change
旧宗主国の領域ごとのナショナリズム(変形 cuius regio, eius religio)

■パレスチナ問題に振り回される世界における西サハラ問題

トランプが暴露したモロッコ国家とイスラエル国家の共同利害　問題持続と治安支援
隠微だが大規模なイスラエル移民送出、モサドの活動受容、ベン・バルカ誘拐事件
オスマン帝国から/また中東諸国体制から/別置されたモロッコ　その特殊な位置
サハラウィが抱えるパレスチナ人とは異なる条件(被占領・分断・難民化・離散は共通でも)

サハラウィ・アラブ民主共和国 SADR とモロッコ人とに対して、テルアヴィヴ大モシェ・ダヤンセンター准教授 Bruce Maddy Weitzmann は Amazighité vs. ʕUrūba: Ethnicity in the Maghrib, *Routledge Handbook on the Modern Maghrib*, George Joffé (ed.), London: Routledge, 2021.や *Amazigh Politics in the Wake of the Arab Spring*, Austin: University of Texas Press, 2021.を公刊しようとしている.

B] ベルベル人の世界 サフラワが拠って立つ歴史的・文明的基盤

■歴史的な目印

▸ヘブライ語聖書ヨナ書 1：3 タルシシュ逃避行　11 世紀ラビのラシーの注解ではタルシーシュ海

▸ユグルタ戦争(前 111～105、ヌミディア王ユグルタ、マウレタニア王ボックス、ローマ側はマリウスやスラ)
サルスティウス〔栗田伸子訳〕『ユグルタ戦争 カティリーナの陰謀』、岩波文庫青版 499 ポエニ戦争→帝政成立の過程

▸ベルベル人［ヒッポ(アンナバ)の］アウグスティヌス、母モニカ アフリカ人意識 『告白』『神の国』

▸カラウィイーン大学 イドリース朝のもと 859 年ファースで創立(イドリースィー1100-65、イブン・マイムーン 1135-1204、イブン・アラビー1165-1240、イブン・ハルドゥーン 後出、レオ・アフリカヌス 後出、アフマド・ブン・イドリース 1760-1837、ムハンマド・アルカッターニー1873-1909、アブドルカリーム・アルハッタービー1882-1969、アッラール・アルファースィー 後出、ファーティマ・アルカッバーイー1932-、らが関係者. ジェルベール・ドーリヤック 938？-1003［教皇シルウェステル 2 世］を加える説も.

▸イブン・ハルドゥーン 1332-1406 トゥーニスで預言者ムハンマドの教友フジュル・イブン・アディ・アルキンディの子孫として生れ、名はムハンマド・アブー・ザイド・アブドッラフマーン・ブン・ムハンマド・ブン・ハルドゥーン・アルハドラミー。マグリブ各地での経験・観察をつうじ社会・国家・文明の基礎理論を固め社会学の先駆者となる。アサビーヤ(結合の絆)ʿasabīya という概念が注目される。「族」的結合やタリーカ(神秘主義タサッウフ諸教団)の結合。晩年はカイロに定着、ダマスクスを包囲したティムールとも会見した。

イブン・ハルドゥーン〔森本公誠訳〕『歴史序説』全 4 巻、岩波文庫、2001.

▸レオ・アフリカヌス 1494-1554 本名アルハサン・ブン・ムハンマド・アルワッザーン・アルファースィー、アンダルスはグラナダ生れ(陥落後の混乱の中で家族はファースに移ったので、ほぼ完全にファースの人)のベルベル人旅行家・外交官。カラウィイーン学院で学び、若くしてティンブクトゥへの使節団に参加、サハラ南縁のソンガイ帝国を見聞、ついで訪れたイスタンブルからエジプトのナイル河谷を南下、トゥーニスに戻ったところでスペインの海賊船に囚われ奴隷にされ、ローマで教皇レオ 10 世に認められて解放され改宗させられてヨハンネス・レオ・デ・メディシスの名をもらう。彼はオスマン帝国対策の情報を求められるが、医学用語辞典を執筆したボローニャをはじめイタリア各地を遍歴の後、トゥーニスに戻り、仮の姿からムスリムに復帰して没。この間 1550 年 *Della descrittione dell'Africa* が出版され、ヨーロッパでのアフリカ地誌の基本情報となる。

▸シェイクスピア「ヴェニスの商人」(1596-98 の間に書かれた)に登場するモロッコ王子

ポーシャに求婚するモロッコ王子・アラゴン大公・バサーニオの 3 人がクジ引き金銀銅の箱選びに挑戦させられ、前 2 者がそれぞれはずれの金・銀を選んでバサーニオが勝つ話。エリザベス女王時代のイングランド社会はモロッコをいかに見ていたか。**勝山貴之「地の果てからの来訪者と『ヴェニスの商人』」、「同志社大学英語英文学研究」84 号、2009 年 3 月、pp.23–55.** http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000011692

▸セルバンテスが言う『ドン・キホーテ』の原本 第 1 部（1605)、そして裏付けの第 2 部（1615）

第 1 部の序で自分はオリジナルな著者でなくラマンチャの資料庫で見つけたと言い、第 9 章ではシデ・ハメテ・ベネンヘリによる「ドン・キホーテ・デ・ラマンチャの物語」と題するアラビア語の手稿に基づくと述べ、世人にドン・キホーテが衆知されていた第 2 部では、第 44 章でベネンヘリに自分はベルベルだと言わせている。

余部福三『アラブとしてのスペイン』、第三書館、1992.

■マグリブ最西部で展開したスルターン国・王国の王朝

▸イドリース朝 789～926 預言者ムハンマドのいとこで娘婿アリーの子ハサンの系列の子孫イドリースがマディーナでの反乱に失敗し、はるばる逃れて来てベルベルのアウラバ族の支持を得てひらいた王朝。シーア派色は強くない。首都ファース。東方のファーティマ朝に滅ぼされ、さらにアンダルス側の後ウマイヤ朝が征服。

▸ムラービト朝 1040~1147 ベルベル遊牧民のサンハージャ部族連合を中核とし、リバート(修道場)で熱烈な修行をするムラービトゥーン(修道士たち)が特徴的な存在。サハラやサヘルの西部一帯から北アフリカ・アンダルスまで拡がる地域を、長距離交易と機動的軍事力が支えるスンナ派国家として統一した。首都はマラケシュ。

▸ムワッヒド朝 1130~1260 モロッコのアンティアトラス山脈高地に定住するベルベルのマスムーダ族出身の学者イブン・トゥファイルがバグダードなど東方遊学から戻って、タウヒード(神の唯一性)を強調する運動を興し自らマフディ(救世主)と称えると、彼を奉じるマスムーダ族の運動がムラービト朝を倒し、マラケシュを首都に建国、アンダルスまで支配した。マラケシュとコルドバとを結びイブン・ルシュドを抱えるこの国家は、その学術・文化においてヨーロッパから讃仰される存在だったが、内部分解とレコンキスタ運動の圧力とで衰えた。

▸マリーン朝 1244～1465 ベルベル遊牧民のザナータ族が主導するスルターン国。首都はファース。砂糖輸出などヨーロッパとの交易盛ん。カスティーリャに臣従するナスル朝のグラナダ王国の生き残りを支援。マリーン朝自身もムワッヒド朝の束の間の再興 1465～71 に倒れる。

▸ワッタースィ朝 1472～1554 ザナータ族内部の陰謀に満ちた抗争から生まれるスルターン国。首都は同じくファース。アブー・アブドッラー・アルブルトゥカーリーをはじめ、君主はカトリック勢力に対して宥和的。グラナダ陥落後の離散者受け入れ。地中海・大西洋沿海都市がポルトガルの手に落ち、殊に西サハラではそこから内陸の奴隷狩りガ行われ、カナリア諸島はその収容拠点となる。サアド朝の南からの圧力により衰退する。

▸サアド朝 1549~1659 移住アラブ遊牧民系の王朝で、自称するシャリーフ(預言者ムハンマドの末裔)の権威とシャーズィリー教団の組織力に拠り、サハラの彼方ニジェル河彎曲部のティンブクトゥにまで伸びる領域を支配。オスマン帝国が組み込まず放置したマグリブ地域となった（1571 年レパント海戦の敗北で西進を阻止された面もあるが、交雑するベルベル領域の支配を敬遠した)。その結果、サアド朝独自の対ヨーロッパ外交があり得た（前記「ヴェニスの商人」で問題となるモロッコ像とも関連)。スルターン国の首都はマラケシュだったが、1603-27 年の継承をめぐる内戦でマラケシュとファースとの 2 つの権力が対立、モロッコの南北問題の起源となる。

▸アラウィ朝 スルターン 1666~1957、国王 1957～現在 人為的なシャリーフ権威に拠る支配という点では前王朝と同種だが、中央集権志向（中央政府マフザンの権力の及ぶ場 bilād al-makhzan とそれ以外の言わば監禁地域 bilād al-sibā'という二分法思考で前者の拡大を追求）とその反面の黒人奴隷軍団 jaysh al-ʕabīd による権力保障という、この王朝独自のスタイルを産んだ。しかし、18 世紀後半以降は部族的次元での自治が強まる。19 世紀フランスのアルジェリア植民地化に対して、アブドルカーディルが率いる抵抗運動を応援しようとして抑止され、20 世紀初めフランス・スペインによる保護国という形での植民地化の徹底には、それへの抵抗の高まりとの間で抜け目なき中間ブローカー機能を体得し（1930 年「慣習法」適用を看板に掲げるベルベル勅令に示されるように)、形式上の「独立」「立憲制移行」後も「西サハラ問題」を道具立てとして国際的庇護を確保する綱渡りを操作する。

■植民地主義への闘いの系譜　思想的根拠と運動スタイル

▸アッシャイフ マー・アル-アイナイン al-Shaykh Mā' al-ʕAynayn の場合

モハンメド・ムスタファー・マー・アルアイナイン 1830/31〔ワラタ〕~ 1910〔テズニト〕

父 モハンメド・ファーディルはカーディリーヤ教団メンバーで、それに属すファーディリーヤ教団を興す

兄 アッシャイフ サアド・ボーSaʕd būh カーディリーヤ教団の尊敬されるマラブー、モーリタニア・セネガル以南の征服を進める仏当局と接触、協力姿勢で感化・説得の影響力もつ。弟のジハードには止めるよう助言。

1859 ティンドゥーフのオアシスに移住、遊牧民的野営の教場の名声が各地から多数の学生を集める。

1887 モロッコのハサン 1 世、彼をティンドゥーフの代官（カーイド）に任命。

1898 スマーラでリバート（修道場）建設、スルターンアブドルアズィーズは援助(資金・資材・職人・武器など)

1904 マー・アルアイナインのジハード宣言、サハラ諸部族はガーズィー(信仰戦士）活動へ。サアド・ボー反対

タンジャの仏公使館が発行する週刊アラビア語紙「al-Saʕāda アッサアーダ」は、〈サハラのシャイフ〉を中傷してシーア派とし、スルターンとの関係の分断を図る。

1905 スーフィズムの研究者としてフランスの対ベルベル工作に当たっていたザヴィエ・コッポラニ(1866-1905、コルシカ人の両親からアルジェで生れ、植民地行政官として活動）のモーリタニアでの暗殺事件(5/12)。

1910 マラケシュを制圧したマー・アルアイナインのジハード軍は、ファース進軍をフランス軍に阻まれ、壊滅。マー・アルアイナインはアガディール近くのイズニトで没。短い高揚期はモロッコ事件第 1 次・2 次の中間。

▸ハーッジ・オマル・ブン・サイード・トァル Hājj ʕUmar bun Saʕīd Taʕl の場合

オマル・ブン・サイード・トァル 1794～1864 モーリタニアの直ぐ南、セネガル川沿い、フタ・トロ Toucouleur(モロ・黒人混血)、ティジャーニー教団員、戦士集団指揮者、西アフリカ政治指導者

セネガル反仏抵抗の英雄　Khalifat khatim al-awlīya(全聖者たちの代理人)/Qutb（宇宙の基軸）/等の称号

1828 マッカ巡礼

1830 帰路ダマスクスへ、滞在中エジプトのイブラーヒーム・パシャと交流

1831-37 ソコト滞在　ソコト・カリフ国スルターンのモハンメド・ベロと密接な交流。強い影響を受ける。

1852 ギニアのフタ・ジャロンでジハード宣言　すでに準備整う。仏軍の武器で武装した人員、欧人助言者。対象は、堕落したムスリム、ヨーロッパ人侵攻者、Futa Toro や Futa Jallon その他の地元支配者たち。

1857 セネガルのメディナ城塞では、立て籠もった仏軍を包囲したが、仏セネガル総督として西アフリカ支配に辣腕ふるうことになるフェデルブ将軍の増援部隊到着により、失敗に終わる。

1862 前年のニジェル河右岸のセグーを解放したことにより、ティンブクトゥから西アフリカ大西洋沿岸内陸部一帯にかけての政治的統合が出現した。このような状況が維持されれば、1884-85 年アフリカ分割を定めたベルリン会議は、様相の異なるものになったかもしれない。ハーッジ・オマル・トァルは、マー・アルアイナインの兄のアッシャイフサアド・ボーに連絡を取って協力を求め、断られたりしていた。スペイン領サハラの後背地に目を向けなければならない。

■〈ワタン〉のとらえ方

watan　郷土／祖国／ホームランド　　住みなし暮らす「場」　主体的に拠って立つ場所

watanīya　愛国主義／民族主義／ナショナリズム／結束する国民を創り出そうとする運動

〔板垣私見〕グローバルな muwātin 革命における市民決起の連帯[意識]の「場」へ

balad<bilād　村・町・国＜或る領域的(政治・社会的)な地域空間　帰属感／意識と結合

turāb　地面／土地／「天と地」の地　物質的・物理的・景観的・風土的な観察対象、感覚

マー・アルアイナイン：turāb al-beidān 白色の大地　モーリタニア・西サハラ・モロッコ・アルジェリア南西部・マリ北部・など

ハーッジ・オマル：ジハードの地　モーリタニア・西サハラ・モロッコ南部・セネガル・ガンビア・ギニア・マリ・ニジェル・ナイジェリア・など

ベルベル世界の問題としては、西サハラのサハラウィたちにとって、「ワタン」はこれからどのように捉え返されていくであろうか。半世紀のサフラワの課題を打開・解決するために、

１）歴史的にベルベル（アマジグ）が自らを発展させてきたその多様性の現実把握

２）モロッコの社会と国家の変革のために、モロッコの「同胞」との関係の結び方

３）サフラワの「ワタン」を地球化する方途
についての議論が進められなければならないのではないか。

C］モロッコの変革、アルジェリアの変革、世界の変革へのヒント

■モロッコに押し寄せる「列強」の取引とその係累の連帯責任
今日の事態を招いたフランス・スペイン両国家の責任
英仏協商(エジプトとモロッコ分配)と桂タフト協定（朝鮮とフィリピン分配)、ドイツ モロッコ事件
■モロッコ「鉛の時代」と「公正和解委員会」
なぜ、西サハラやサハラウィが無視・軽視されるのか
■二つのヒラークの意味　［砂の戦争（モロッコ・アルジェリア戦争、1963.9～64.2）の後］
2016 年 10 月~17 年 6 月　モロッコ、リーフ抗議運動
2019 年 2 月~20 年 10 月　アルジェリア「革命」
■西サハラとリーフ
1950 年代が包蔵していた「可能性」、1958 年のモロッコ解放軍とイスティクラール党
メフディ・ベン・バルカとムハンマド・バスリー　アルジェリア・エジプト
西サハラでの仏・西軍打破（イフニ・スマーラ）とリーフ民衆、そしてウフキール将軍
1920 年代アブドルカリーム・アルハッタービーとリーフ戦争・リーフ共和国の伝統
人民勢力国民連合ＵＮＦＰからベン・バルカ抹殺へ　　ムハンマド・バスィーリー

D］日本社会にとっての西サハラ

琉球　アイヌモシリ　在日コリアン

私市正年・佐藤健太郎編『モロッコを知るための 65 章』、明石書店／松井健・堀内正樹編『中東』(講座・世界の先住民族:ファースト・ピープルズの現在4)、明石書店／中野暁雄・堀内里香編訳『モロッコのベルベル語による民族誌的語り』、イスラム文化研究第 106 集ベルベル研究、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所／P・ラビノ―〔井上順孝訳〕『異文化の理解:モロッコのフィールドワークから』、岩波現代選書 59／ITEAS「紛争と危機管理」研究班編著『西サハラをめぐる紛争と新たな文脈：協議による西サハラ問題解決への新たな希望』、Parade eBooks／石原忠佳『モロッコ アラビア語　会話と文法』、大学書林／中野暁雄『南西モロッコ・ベルベル調査研究報告 1 アンティアトラス山村における集団の機能と構造』、『AA 言語文化研究』No. 19／堀内正樹『モロッコのイスラーム:聖者信仰の概要と事例』、『民族学研究』50(3)／深沢安博『アブドルカリームの恐怖 l horror de Abdel-Krim: リーフ戦争とスペイン政治・社会の動揺』、論創社／江里光照『モロッコのリーフ戦争とアブドゥルカリーム:ワタン防衛のスペイン賄賂とドイツスパイ資金』、創英社・三省堂書店／アブデルケビール・ハティビ〔沢田直編訳・福田育弘訳〕『マグレブ複数文化のトポス:ハティビ評論集』、青土社／白谷望『君主制と民主主義:モロッコの政治とイスラームの現代(ブックレット《アジアを学ぼう》別巻 11)、風響社／斎藤剛『〈移動社会〉のなかのイスラーム:モロッコのベルベル系商業民の生活と信仰をめぐる人類学』、昭和堂／四方田犬彦『モロッコ流謫』、ちくま文庫／ブノア・メシャン〔河野鶴代訳〕『アフリカの二つの夏:中東六日戦争とモロッコの未遂クーデター』、筑摩書房／村松剛『アルジェリア戦線従軍記』、中央公論社／山田吉彦『モロッコ』、岩波新書青版 76／ローザ・ルクセンブルク「モロッコをめぐって」〔野村修・高原宏平訳〕、『ローザ・ルクセンブルク選集』2, 3、現代思潮新社.

II.　講演

西サハラの世界史的位置を考える

――トランプの置土産を眺めつつ

板垣 雄三

こんにちは、みなさま。今日、西サハラ問題について考えるこの集まりに大変たくさんの方が参加してくださっていると伺いました。本当にありがとうございます。今ご紹介がありましたが、気がついたら 90 歳になってしまいました。本日の講演資料も「心血を注いで」と評していただきましたが、齢のせいで欲張ってあれこれ書き込みたいと思っていたことのうち大事な点が抜けてしまったことに気づいたりしています。これからお話することも時間の制約で不十分なところが出てくるかもしれません。それらは後ほど質問していただき補いを付けたいと思います。よろしくお願いいたします。

わたしが西サハラや、それに関連することを身近に感じたのは、1960 年の前後ころだったと思います。中学（旧制）の同窓生と久しぶり会ったとき盛んにスペイン語が飛び出すので、一体どういうことか訊きますと、彼は水産関係の会社に勤めていて最近はカナリア諸島[1]に通っているんだと言い、ラス・パルマスの街やスペイン領サハラのラアユーンの街の話をしてくれました。そこで彼がスペイン語をしゃべる背景にある歴史と、そんなことには無関心でマグロを食べている日本人の生活とを、考え直す機縁を得たのです。

研究者になってから 70 年間ほどの研究生活の中でわたしが考えてきたことを、本日、西サハラの問題につなげてお話してみたいと思います。60 分の枠内で話すということなので、新郷啓子さんのご本[2]をぜひお読みいただきたい。詳しくいろいろなことが分かると思います。また先ほど、岩崎有一さんからは「いま」の情況について簡にして要を得たお話を伺うことができました。そこで、わたしは時空の視野を拡げて、問題の解決を阻んでいるものは何か、西サハラのサハラウィの人たちが格闘しているその問題の出口、それを考えてみる。同時にそのことを考えるわたくしたち自身の今の在り方もまた考え直してみる。そういうことに重点をおいたお話をすることになると思います。

---

[1] 大西洋の、モロッコと西サハラの沖合 100km 余に位置する 7 つの島からなる群島。15 世紀末カスティーリャ王国に征服され、のちスペイン領となった。

[2] 新郷啓子『抵抗の轍――アフリカ最後の植民地、西サハラ』インパクト出版会、2019 年。

Ａ］　「西サハラ問題」解決への前進を阻んでいるものは何か

■１．欧米中心主義の終局

ここで、ものの考え方を再検討することが迫られていると思います。欧米中心の世界秩序というものが、今ガタガタと崩れてきてしまっている中で、これまでのわたしたちの考え方の基準、また手順、それらを大きく見直し根本的に組み替え直すことが、今、求められているのです。

そのことについて、わたしはいろいろな場で書いています。「信州イスラーム世界勉強会」という市民の自主的な学びの集まりの代表を務めていますから、そのＨＰやブログにも、頭をどう切り替えるべきなのかについて、さまざまな角度から書いております[3]。また、欧米中心主義の終わりに関して、12 年前バイデン氏が当時オバマ大統領と組む副大統領になったとき彼を批評したわたしの文章を、12 年後に彼が大統領になった今、塩尻和子さんが責任者になっておられる「アラブ調査室」がその HP に転載してくださいました[4]。アクセスして見ていただければ、と思います。

世界史における「新しい市民革命」の時代が、いよいよ幕を開けようとしている。これをわたしは「ムワーティン[5]革命」と呼んでいるのですが、それがいろいろなところで起こってきている。西サハラの人々の闘いもその一つです。今はミャンマーでもそうですが、世界中いろいろなところでの市民の立ち上がりがグローバル現象となってきている。このことに関して、10 年前に書いたわたしの議論を資料として本日参加の方々には申し込みと共に送っていただきました[6]。読んでいただけたでしょうか。いずれにしても、我々の頭にこびりついた欧米中心主義から脱却することが、重要です。

▸国際刑事裁判所を襲う激震　パレスチナをめぐる戦争犯罪裁判着手決定

国際刑事裁判所（ICC）が、イスラエルの戦争犯罪を問う裁判に踏み切ることを本年（2021 年）2 月 5 日に発表しました。公正な立場で 6 年間、事前の予備調査・取調べを進めてきた ICC 首席検察官ファトゥ・ベンソーダ（ガンビアの女性法律家、元法相）に対して猛烈な圧迫・嫌がらせをした米国トランプ政権が退場した結果ですが、それは

---

[3] 信州イスラーム世界勉強会　https://www.shinshu-islam.com/

[4] 板垣雄三「瀕死の欧米中心主義」https://arabstudies.jp/pdf/2021-02_01.pdf

[5] muwātin　アラビア語で「市民」の意。Homeland を意味する watan （ワタン）から派生している。

[6] 板垣雄三「人類が見た夜明けの虹―地域からの世界史・再論―」、歴史科学協議会編集『歴史評論』No.741(2012 年 1 月号)、校倉書房、pp.5-21.

ファトゥの後任検察官（6 月 15 日交代）を選ぶ ICC 加盟国会議の 1 週後開催につながり、イスラエルを擁護する側の策動もあり、誰が継ぐかは世界の注目を集めました。ファトゥの出身国ガンビアは、西サハラとは南へモーリタニア・セネガル・ガンビアと列をなして並ぶ近隣国です。西サハラ問題も当然 ICC が関わるべき問題だとわたしは考えていますが、それはまだ浮上しないままです。しかし、国際政治の強い風圧にさらされているようにみえた ICC ですが、一昨々日（3 月 3 日）首席検察官ファトゥ・ベンソーダは、パレスチナのイスラエル占領地における人権侵害および戦争犯罪をめぐる裁判がいよいよ開始される旨の公式発表をおこない、既定方針に変更がないことを確認しました。ネタニヤフ首相からイスラエル兵士にいたる人々の犯罪が問われることになってくるでしょう。これは、西サハラ問題がこれからどうなるかに影響を及ぼす重要な環境条件です。

このように世界は変わりつつあります。けれども同時に、旧来の欧米中心的な考え方またその体制に付随する考え方が、今なお頑強に居座る。その頑強な居座り局面が新郷さんのご本でも書かれています。どうにもならないボトルネック、行き詰まりの現在の局面に関係しているわけです。この場合、既存の国家というものが大きな顔をしている。そのため民衆・市民が非常に苦しんでいる。いくら声を上げてもその声は届かない。これは、世界中いたるところで起きている現象。我々自身も今、そういうことを感じている。そういう中で、「国」というものが非常に問題なわけです。それなのに「国」を獲得するために一生懸命模索し頑張っている、これが西サハラの人々、サハラウィの抱える問題なのであり、正面から向き合わねばならぬ矛盾なのですね。

▸国家の裁判権免除法理と国際人権法との衝突

韓国の大法院が元徴用工の賠償請求を認める、これに対して日本国は、国家は［他国の］裁判に応じてそれに従う義務から免除される特権があるという、旧来の国際法の立場に固執している。世の中変わって、個人個人の人間の権利が優先するという判断に対して、「国」というものの権威にしがみつくことが今、起きています。これは日・韓関係の問題だけではありません。他国のあるいは国際的な司法との関係で、さまざま起きつつあることです。

▸国際法　イスラーム法スィヤル

国際法に関して、国際法というものを創り出したのは西洋だと思っている人が多く、大学の法学部の先生たちもそのように教えていると思います。しかし、国際法はむしろ、

イスラーム法のスィヤル（siyar）[7]から発展し、それが具体化してきたものと考えるべきです。

条約とか使節公館とかパスポートなどの起源もそれです。また治外法権はキャピチュラシオン（Capitulations, 対仏1536年、対英1579年）[8]といって、16世紀に——16世紀というのはサハラの問題についてもいろいろなことが起きた重要な時代です——、オスマン帝国がフランスやイングランドに対して与えた特権です。犯罪者は自国の領事に引き渡され裁かれる領事裁判権とか、居留地の設定が認められるとか、関税も一方的には決められない協定関税、等々の特権を、オスマン帝国はヨーロッパ諸国に順次与えていったのでした。フランスが先行したから、第二次世界大戦まで外交用語はフランス語となりました。こうした過程を通じて、宗教が違えば敵同士だとずっと思ってきたヨーロッパの人々が、宗教が違っても国際的にはたらく法というものがあるのだということをイスラーム文明から教わり、そこでヨーロッパ側も国際法の体系を学習して適応するようになった。こうした経過を隠し、すっかり忘れたことにして、ヨーロッパ発の国際法という考え方が正統派にされてしまった。試験でもそう答えないと、落第です。

▸主権・法人　国際司法裁判所による西サハラの帰属根拠の調査

ここでヨーロッパがつくりだす法体系の拠り所の中心が、〈主権〉という概念です。主権とは国家の権力主体です。また、国家は法人だ、ひとりの人間と同じにふるまう。そういう形で国家というものを考える。西サハラの人たちは今、このようなものが自分たちの手もとにないために苦しめられている。それをどうやって手に入れるか、ということをやっている。これは二重の悲劇です。

国際司法裁判所（ICJ）が、モロッコには西サハラ統治の歴史、西サハラに主権を働かしてきた歴史、というものがあったのかなかったのかを調査して、それは「なかった」と判断しました。話が複雑になりますけれども、ムスリム社会には「バイア」[9]という概念があって、金曜昼の集団の礼拝の説教の中で統治者の名前が挙げられるのに信者たち

---

[7]（宗教共同体間の）「行為規範」を意味しイスラーム法シャリーアの国際法規定をさす言葉。

[8] オスマン帝国が領内在住の外国人に対し恩恵的に認めた特権。通商・居住の自由、租税免除、身体・財産・企業の安全などを保障した。

[9] アラビア語の bayʿa は，元来は売買成立時の「手打ち」だが、イスラームのもとでの政治の次元では，一団の人々が指導者の政治的権威を認めて，その人に服従の意志を示す契約行為。西暦 622 年マディーナの民が預言者ムハンマドと結んだ契約文書（マディーナ憲章）に基づきウンマ（イスラーム共同体）が成立したのが、起点。その後は、集団礼拝で説教者がカリフの名を挙げることで信徒共同体がカリフに従う誓いとされ、さらにそれは君主や大統領に神の加護を願う言葉によって全国人民の社会契約的信任とする約束事となった。

が立ち会うことによって、君主と人民との契約が確認され統治の正当性が保証される、という考え方が働いてきた。緩やかな形ながら社会契約論の先駆です。しかし、これを、西欧のいう国際法の主権国家の概念で考えると、「主権がなかった」という話になる。ザヒール（法令）というのは、フランスの植民地主義がベルベル人をイスラーム法から分断して君主を位置付けようとした策略でした。このような問題が、国際連合における西サハラ問題の取り組みにも影を落としているのです。

▸国際連合、国民国家の虚像　とぐろ巻く植民地主義・人種主義・軍国主義

パレスチナ問題が非常に深刻な国際問題として起きてしまった原因としては、ユダヤ人迫害とイスラーム憎悪のヨーロッパの歴史、キリスト教の終末論とシオニズム運動、英国の対応、ホロコーストなど、いろいろの背景がありますが、直接の引き金は、国連がパレスチナ住民の意思を問うことなしに、パレスチナをアラブの国・ユダヤ人の国・国際化されたエルサレムという 3 つに分けることを決めた 1947 年のパレスチナ分割決議でした。当時の国連は、まだアジアの国々の独立が進んでいる過程で、米国やヨーロッパやラテンアメリカの国々がこの決議を進めてしまった。冷戦のはずの米国とソ連の応援でイスラエルだけが独立し、国連決議など無視して領域を拡大したイスラエルがヨルダン・エジプトとともにパレスチナを 3 分割するという、国連決議否定の別の状況が生まれてしまったのに、国連はパレスチナ難民を追い散らしたイスラエルを平和国家と認め国連加盟国にした。こうした国連の過ちがパレスチナ問題の混迷の直接の原因であり、国連には大変な責任があります。問題解決のために国連に頼るというその後の歴史に、大きな困難と疑問を残したのです。

そもそも帝国主義の世界分割で植民地にされた地域も 20 世紀後半には名目上は「独立」して「国民国家」を名乗り、植民地のまま残ったのは数少ない。アフリカでは、西サハラだけが最後の植民地ということになっていた。しかし世界中で、独立したことになっている国も、旧支配国に操られたり、急所を握られていたりして、本当は決して独立していない。そういうことを言えば、今日の話の最後で言いたいことなのですが、日本も本当に独立国なのか、これは非常に問題ですね。国民国家という虚像を考えなければならない。今、崩れかかった欧米中心の国際秩序は、変装し仮面をかぶった植民地主義・人種主義・軍国主義を操って、やっと体裁だけ「国民国家」が成り立っていることにしている状態なのです。

ですから、もとの植民地の形のまま、旧支配国の領域を継承して独立する形で国民国家が出来上がり、それらを含めた 200 に近い諸国の連合体として、国際連合が成り立っ

ている。こうした現状は、それが当たり前だとか正しいとか、こういう経路で世界はよくなる、とそのまま肯定できる話ではない。植民地主義が引いた線引きで決まった境界線に基づいて成り立つナショナリズム、これには深く考えてみるべき問題があるのです。

そういうところで、今、西サハラの人々は非常に大きな矛盾を抱えながら、未来を拓く出口を探しているという状態なのですね。ですから、西サハラ問題の解決のためには、住民投票ができれば、まずは現実的な目標が達せられる、一歩一歩進めばよいという、そうした手前の手続き論だけではなしに、もっと先まで見通すとどういうことになるのかについても、我々自身の問題も含めて、西サハラの人々と一緒に考えていくことが大切だろうと思います。

■２．パレスチナ問題に振り回される世界における西サハラ問題

▸トランプが暴露したモロッコ国家とイスラエル国家との共同利害

西サハラ問題には、どうしてもパレスチナ問題が付きまとってきます。昨年 2020 年 9 月湾岸のアラブ首長国連邦とバハレーンが米国の仲介でイスラエルと国交を開いた「アブラハム合意」を機に、これを追いかけてモロッコもイスラエルとの国交「成立」へ、という動きがようやく表向きにも現れてきたことが注目されました。しかし実質的には、モロッコはそもそもイスラエルと非常に深い関係をすでに持っていたのです。

モロッコはフランスの保護国という植民地の状態から解放され独立する 1956 年の時点で、イスラエルと非常に深い関係をもっていました。そして、アラブ世界の中では唯一、モロッコの国王がイスラエルとの和解ということを公然と言ったりもしていました。表向きにはアラブ世界の風潮に合わせ、イスラエルとは一線を画す姿勢はとってきたものの、隠微な形で深いつながりがあったことはよく知られていました。これをあっけらかんと全部さらけ出すようなことが昨年の米国大統領選挙のなかであれこれあり、トランプ氏の置土産として表面化したわけです。

▸隠微だが大規模なイスラエル移民送出

北アフリカをはじめアラブ世界では、歴史的にユダヤ教徒の住民が方々の国に存在していましたが、わけても大きな規模のいわゆるユダヤ人人口を抱えていたのはモロッコでした[10]。そのかなりの部分をこっそりとイスラエルに移すということを、モロッコの

---

[10] アラブ・イスラーム征服以前は先住民ベルベル人のユダヤ教徒がいた。イスラエル建国までは、アトラス山中に多数のベルベル人ユダヤ教徒のコミュニティがあった。また、フェズをはじめ、都市部には、レコンキスタでイベリア半島を追われたユダヤ教徒が定住した。第二次世界大戦前、モロッコのユダヤ教徒人口は 20 万を超えていた。独・伊に敗れた仏の対独協力の

王政は進めてもきました。その代わり、モロッコの外交政策の展開・調整では、様々な面でイスラエルからの情報に助けられて来たと見られます。

▸ベン・バルカ誘拐事件

これについては、後でもまた取り上げることになりますが、1965 年 10 月にベン・バルカ[11]というモロッコ人がパリで誘拐され、行方不明になってしまうという事件がありました。2018 年 10 月サウジアラビアのハーショクジー[12]というジャーナリストがイスタンブルで消されてしまい、サウジの皇太子の命令で抹殺されたという嫌疑が表に出てきていますが、同じようなことが半世紀余り前に起きました。当時、モロッコの政治運動の有力リーダーを跡形もなく消した黒幕は、モロッコ国王ハサン 2 世だろうと噂されました。2018 年になって明らかになってきたのは、パリでベン・バルカの誘拐・抹殺を実行したのはモロッコの秘密機関とフランス警察だったが、そのお膳立てを取り仕切ったのはイスラエルのモサドだったという内幕でした[13]。

わたしは 1965 年前半、ベン・バルカとカイロでいろいろ付き合いまして、随分深い議論を交わした記憶があります。夏に彼と別れるとき、彼はこれからいろんなところに行くんだと言っていました。そしてパリに行って、そこで事件が起きてしまったので、個人的にもいろいろなことを考えさせられる、印象深い存在でした。

▸オスマン帝国から／中東諸国体制から／別置されたモロッコ

モロッコはオスマン帝国には属さなかった。北アフリカで、モロッコの手前（現在感覚で言えば）アルジェリアまではオスマン帝国の版図に入りますが、オスマン帝国はモロッコにまでは手をつけなかった。

さらに第一次世界大戦後、オスマン帝国が解体されたところで、英国とフランスが中心となって地図上で線引きをし、現在の中東の国々の「国分け」なるもの――「中東

ヴィシー政権は、モロッコでもユダヤ人を収容所に送るよう命じるが、スルターンのムハンマド・ベン-ユーセフ（独立後の初代国王ムハンマド 5 世）は、臣民たるユダヤ教徒を守るのはスルターンの責務として、これを敢然と拒否したので、ホロコーストのモロッコ波及は阻まれた、と言われる。モロッコのユダヤ人コミュニティは，これを美談として語り継ぐ。

[11] メフディ・ベン・バルカ（Al-Mehdi Ben Barka、1920‐1965）。モロッコの知識人・第三世界理論家、左翼政治指導者で国王と対立。

[12] ジャマール・ハーショクジー（Jamal Khashoqji、1958‐2018）。サウジアラビアのジャーナリスト、批評家、作家。トルコのサウジアラビア総領事館で殺害される。

[13] Ronen Bergman, Rise and Kill First: The Secret History of Israel's Targeted Assassinations, Random House, 2019. (邦訳)ロネン・バーグマン［小谷賢ほか訳］『イスラエル諜報機関暗殺作戦全史　血塗られた諜報三機関』上・下、早川書房、2020 年。

諸国体制」とわたしは呼んできました――が、出来上がります。第一次世界大戦の産物です。しかし、そこでは、これからここにユダヤ人の国を作るのだというパレスチナを区切った綱を伸ばす形で、繋がり合った綱でいろいろと地分けをして、それで出来上がったワンセットの中東諸国体制という枠組が出現したが、これには入れ込まれず例外的にその体制の脇に立っていたのが、モロッコだったのです。別置されたモロッコという非常に特別の立場なのです。これが今、西サハラ問題がパレスチナ問題に密着しながら、パレスチナ問題と微妙に異なる次元のものとなっている原因で、それを今日は考えたいわけです。

▸サハラウィが抱えるパレスチナ人とは異なる条件

西サハラの問題はいろいろな点でパレスチナ問題と共通点を持っていますが、違う点もある。それがベルベルの問題です。

西サハラとモロッコは、同じような立場の人たちが庶民として繋がり合い、混ざり合う関係で、存在してきた。歴史を貫く繋がり合いです。単なる〈植民者〉対〈先住民〉という関係とは違う関係であることを考えなければなりません。

今、イスラエルでは、〈アマジグ〉対〈ウルーバ〉、〈ベルベル人（アマジグ）であること〉対〈アラブであること〉という対立軸への研究に改めて関心が向けられている[14]。これはフランスとモロッコ王政がやってきたことという面もあり、住民を〈アラブ〉対〈ベルベル〉に分けて対立させるのは昔からある話ですけれども、それを今また蒸し返して考えようという政策志向に対して、アラブとかベルベル人に分けられないベルベル人の多様性を持ったあり方が歴史的に形成されてきたということ、これを考えるのが今日の話の主題なのです。

---

[14] Bruce Maddy-Weitzman（テルアヴィヴ大学名誉教授）は Amazighité vs. ʕUrūba: Ethnicity in the Maghrib, *Routledge Handbook on the Modern Maghrib,* George Joffé (ed.), London: Routledge, 2021.や *Amazigh Politics in the Wake of the Arab Spring*, Austin: University of Texas Press, 2022.でベルベル人アイデンティティを問題としている。

Ｂ］ベルベル人の世界　サフラワが拠って立つ歴史的・文明的基盤

このベルベル人の世界、そしてサハラウィという人々、そういう自覚をもった集団が拠って立つ歴史的、文明的基盤をざっと振り返りたいと思います。

■１．歴史的な目印

▸ヘブライ語聖書ヨナ書１：３　タルシシュ逃避行

常識的にはキリスト教徒風に「旧約聖書」といえば分かりがいいかもしれませんが、ユダヤ教のヘブライ語聖書（タナハ）の小預言書の一つ・ヨナ書で、タルシシュという地名が出てきます。タルシシュとはどこか？ が、聖書研究の中で盛んに議論されてきました。

ヨナという人が神様から、今で言うとイラク北部のニネベ（ネイナワー）に行って預言を語れ、と命じられたのを嫌い、全く逆方向の、現在で言えばジブラルタル海峡の方へ船に乗って逃げるが、嵐にあい、それが神様の怒りを買ったヨナのせいだということが乗組員に分かってしまい、嵐を鎮めるため海に叩き込まれ、魚に食われ、魚の腹の中に 3 日 3 晩いて吐き出されたところで、彼は神様の命令にはやっぱり従おうと戻っていく、という話です。パレスチナのヨッパ（ヤーファー）からタルシシュ行きの船に乗って逃げた、そのタルシシュの場所とはどこだったのかという問題ですね[15]。

▸ユグルタ戦争（前１１１-１０５）

ローマの共和制時代の末期に、ローマがヌミディア[16]と戦争をします。サルスティウスのユグルタ戦記には、この戦争が活写されています。結局は、ヌミディア王ユグルタはマウレタニア王ボックスに――親戚同士なのに、ベルベル人同士の関係というものの面白さ、複雑さ、深刻さから――裏切られてユグルタに手を焼いたローマがユグルタ戦争で勝利し、ローマは帝政へと移っていく。ともかくローマ帝国という存在を生み出させるほどに、厳しく健闘していた、これがベルベルなんですね。このような見方が必要でしょう。

---

[15] 11 世紀のラビのラシーの注解では、タルシーシュ海。

[16] 古代ローマの側でベルベル系種族が住むアフリカ北部地域の王国を指して名付けた呼び名。西のマウレタニアと合わせ、現在のアルジェリア・モロッコの辺り。

▸ベルベル人アウグスティヌス

聖アウグスティヌス[17]という人は、今で言うとアルジェリアのアンナバの出身で、お母さんのモニカもそうですが、どちらもベルベル人です。アウグスティヌスがベルベル人だということは、最近ようやく、どこにでも書かれるようになってきましたけれども、キリスト教の歴史の中で、ベルベル人アウグスティヌスという観点で彼の書いた『告白』や『神の国』を考え直すということは、ずっと棚上げされてきました。こういうことを今、考えることが、これからサハラウィはどうするのかという問題に関わっています。

▸カラウィイーン大学（８５９年創立）

カラウィイーン大学が、モロッコのファース――フェズと言った方が分かりやすいかもしれませんが――に悠久の伝統をもって存在する。このマドラサ（高等教育機関）が人類史の中で最古の大学です。現在、ユネスコはカラウィイーン大学[18]が世界最古の大学であるということを認めているように、その後世界に拡まる大学の出発点がフェズなのです。レジュメ資料に挙げたように、そこでいろいろな人が学びました。後にローマ教皇になるジェルベール・ドーリヤック[19]もそこで学んだのではないかという説をなす者すらあります。

▸イブン・ハルドゥーン

カラウィイーン大学の関係者の一人でもあったイブン・ハルドゥーン[20]は、彼の書いた『ムカッディマ』[21]で有名。翻訳は『歴史序説』と題して、今、東大寺の長老の森本公誠さんが日本語に翻訳し、岩波文庫でも簡単に読めます。イブン・ハルドゥーンについては、19 世紀になってヨーロッパでは、この人こそ社会学の祖だということに気づ

---

[17] アウレリウス・アウグスティヌス（ラテン名: Aurelius Augustinus、354 - 430）。西方キリスト教の基礎を固めた最大の教父、神学者・哲学者。マニ教徒・新プラトン主義を経て、キリスト教徒となった。

[18] 859 年、モスクとして創設。1963 年、国立大学となる。1981 年、UNESCO は、フェズ旧市街を世界遺産に登録、HP で、カラウィイーン大学を世界最古と記している。

[19] ジェルベール・ドーリヤック（Gerbert d'Aurillac、950? - 1003）。初のフランス出身のローマ教皇シルウェステル 2 世（在位：999 年 - 1003 年）。イスラーム文明の学術に憧れ、数学者、天文学者としても傑出。

[20] アブドッラフマーン・イブン・ハルドゥーン（1332 - 1406）。チュニス生まれ、カイロで没。歴史家。イスラーム世界最大の学者と言われ、欧洲では社会学の祖とする。

[21] イブン・ハルドゥーンの『歴史』（正式な書名は『省察すべき実例の書、アラブ人、ペルシャ人、ベルベル人および彼らと同時代の偉大な支配者たちの初期と後期の歴史に関する集成』）の序章と第 1 部にあたる部分。

く。『ムカッディマ』は、ベルベル社会についての経験や観察や分析を通じて、社会・国家・文明の基礎理論を提起したもので、人々が繋がり合う絆の「アサビーヤ」という概念、これが何々部族・何々部族連合とか、あるいはイスラーム神秘主義のスーフィズム教団（タリーカ）とか、こうした人々の集団形成を支える基礎だとして考察した人です。

今、サハラウィの人たちが、長いこと難民キャンプで暮らす中、そこにまた自分たちの故郷の町や村のバーチャル版をつくり出している。それこそアサビーヤですね。まさしく現代的な問題です。これを 14 世紀のイブン・ハルドゥーンが提起した。これもベルベル人の文明の問題なのです。

▸レオ・アフリカヌス

ベルベル人の彼は、レオという呼び名のために、誤解されているのではないか。レオ・アフリカヌス[22]というヨーロッパ風の名前で呼ばれてきた人に関して、彼がアフリカ大陸を縦横に歩き回り飛び回って記録したアフリカの地誌が、アフリカと地中海という空間についての［ヨーロッパ人の、また人類の］知識の土台となってきたことを、忘れるわけにいかないのです。

▸シェイクスピア「ヴェニスの商人」に登場するモロッコ王子

シェイクスピアの「ヴェニスの商人」は、一般にユダヤ人シャイロックの話に焦点があるかのように思われていますが、しかし、重要なトピックとして、モロッコの王子とスペインのアラゴン大公とヴェニス市民のバザーニオとの三人が競う話があります。法学博士の称号をもつ美貌の才女ポーシャに求婚する三人が、まさにくじ引きに相当する金・銀・銅のハコ選びでポーシャと結ばれる相手を決める段です。アラゴン大公よりモロッコ王子の方が先行するところも面白いが、まず金のハコを選んだモロッコ王子がアウト。結局、最後に残った銅のバザーニオがポーシャと結婚することになります。モロッコとヨーロッパとの貿易・政治関係を組み込んだ物語が「ヴェニスの商人」なんですね。この芝居を 16 世紀末のイングランド人が見て楽しんでいたことの意味など、こういう問題を現在の西サハラ問題を考えるところでちゃんと組み込んで考えていくことも重要です。

---

[22] アミン・マアルーフ［服部伸六訳］『レオ・アフリカヌスの生涯』リブロポート、1989 年。

▸セルバンテスが言う『ドン・キホーテ』の原本

『ドン・キホーテ』という作品について考えるとき、作者のはずのセルバンテスの言辞や姿勢が気になる。彼は、これは自分が書いたものではありません、倉庫の中から見つかった古い手稿（マニュスクリプト）を自分がそれなりに書き写した、そういうものなんですと言って――ある種のトリック臭い話ですが――絶えずベルベル人が書いた物語だとセルバンテスが強調することの意味ですね。セルバンテスの偉さと、もてはやされ方と両方の面で。

こういうところで、スペインという国の在り方、ユダヤ教徒やムスリムを追い払った、そして彼らをさんざん痛めつける歴史の上に成り立ってきた国家が、アラブ化したベルベル人の文明に対して、いったいどのような感覚ないし意識、いわば僻みというか歪み隠された劣等感というか、を抱かざるを得ないできた面もあるのではないか。それを逆手にとるというか、それが逆に突き出されるというか、そうした倒錯問題の歴史を考える必要があるということです。

■２．マグリブ最西部で展開したスルターン国・王国の王朝

マグリブ地域（西方アラブ世界）で展開したモロッコ諸王朝の位置と拡がりとをしっかり頭に入れることが重要です。

イドリース朝はマシュリク（東方アラブ世界）から移ってきた人びとの王朝ですけれども、ムラービト朝から後は、イスラーム化しアラブ化するベルベルの人びとの王朝です。ムラービト朝からムワッヒド朝にかけての時代の学者モーシェ・ベン・マイムーン（マイモニデス）[23]はユダヤ教徒ですが、カラウィイーン大学で学びました。そういう宗教間にまたがる対話がありました。ムワッヒド朝からマリーン朝にかけて、このあたりからモロッコの中で、北方のファース（フェズ）と南方のマラケシュという二つの重心、この楕円状の地域構成がモロッコの歴史の一つの枠組となってきます。

サアド朝からが現代に直接つながりが出てくる時代ですけれど、サアド朝の段階でオスマン帝国はその拡張をモロッコの手前でストップする、ということになる。これはレパントの海戦で[24]、ローマ教皇・スペイン・ヴェネツィア連合艦隊にオスマン帝国海軍が初めて敗れたからです。ただし、オスマン帝国がアルジェリアでストップしその先に進むのを止めたのは、レパント沖の敗戦だけではなしに、マグリブの西寄りのほうは、

---

[23] 1135-1204 コルドバのラビ、哲・法・医学者、迫害を逃れフェズついでカイロで活躍。

[24] 1571 年に起こった、ギリシアのコリント湾口のレパント沖での、オスマン帝国海軍と、教皇・スペイン・ヴェネツィアの連合海軍による海戦。

ヨーロッパ諸国との関係が絡む上に、ベルベル人同士の関係がかなり入り組んだ厄介な格好なので、統治する相手にはしない方が楽だ、という判断もあったのではないかと考えます。

そのサアド朝を継いで出てきたのが現在のアラウィ朝です。アラウィ朝は 17 世紀半ばに登場します。言ってみれば徳川幕府がずっと現在まで続いていると考えればいいですね。21 世紀の現在も、徳川の時代が続いている。明治維新のような国際環境条件や王朝のあり方の変転があっても、明治新政府はできずに徳川幕府がうまく生きのび、時代に適応してきた、というふうに考えてみてはどうでしょうか。

■３．植民地主義への闘いの系譜　思想的根拠と運動スタイル

そこに取り入って来るヨーロッパ諸国が様々に植民地主義を展開する。まずはポルトガル、ついでスペイン、そしてフランス、さらに英国も加わってくる。さらに 19 世紀の末近くにベルリン会議[25]を主唱してアフリカ分割の国際的取り決めを定めたドイツが、20 世紀初めにはもろにモロッコに押し出してくることにもなるわけです。

こうした植民地主義が交錯する只中で、現地の人間、ことに西サハラやサハラウィと連なり、「黒いサハラウィ」ではなく「白いサハラウィ」とされていた人びとが、どんな仕方でヨーロッパ勢に対抗し、抵抗の拠点を固めようとしたのか。そこで、二人の人物の例を挙げます。

▸アッシャイフ マー・アル-アイナイン

マーは水で、アイナインは二つの目です。両目の涙というあだ名をもったカーディリーヤ教団指導者のアッシャイフ マー・アルアイナイン。彼が、現在はサハラウィのテント居留地となっているティンドゥーフを拠点に、そこからさらにスマーラに修道場をつくるとか、そういう形で運動を展開し、スペインやフランスに対するジハードを 19 世紀を通じて粘り強く闘った。

▸ハーッジ・オマル・ブン・サイード・トァル

マー・アルアイナイン率いる運動と並んで、というか時間的にはやや先んじて、ハーッジ・オマル・トァルの運動が展開していた。ティジャーニー教団[26]というスーフィー

---

[25] 1884 年 11 月から 1885 年 2 月にかけてドイツ帝国の首都ベルリンで開催された国際会議。ここで列強による「アフリカ分割」の原則が確認された。

[26] ティジャーニーTijānī (1737 - 1815)を創立者とするイスラーム神秘主義教団。

教団のリーダーだった彼は、今で言うとナイジェリア北部の町、ソコトに拠点を造ったりもします。西サハラ・モーリタニアに隣接する場に根ざす人が非常に広い視野で、サハラの彼方、そして西アフリカ全体を見渡すような、ニジェル川流域の広域まで包括して、自分たちの抵抗の場を築こうとしていた歴史、こういうものを振り返ってみたいではありませんか。

■4．〈ワタン〉の捉え方

ここでは、岡真理先生が本日冒頭のお話で言及された「ワタン」という言葉を取り上げます。「ワタン」という言葉がとかく「祖国」という説明で終わるのに対して、わたしは幾分か違和感を抱きます。「ワタニーヤ」というと、「愛国主義」・「民族主義」・「ナショナリズム」などの訳語に置き換えられるので、「ワタン」がついつい「祖国」と理解される事情は分かるのですけれども、むしろ「人間ひとりひとりが、住みなし暮らす場」、「主体的に拠って立つ地」、「選んで住む場所」という語感から出発したいのです。

だから「ワタニーヤ」というのは、地域に立脚して結束する国民を作り出そうとする運動ということにもなるわけです。したがって、西サハラの人びとが「アラブのサハラウィの民主主義の国」を創るのだという国名——旗印ですね——からして、それはまさしく「ワタニーヤ」です。今、欧米中心主義の終わりの断末魔みたいな時代に、グローバルな新しいムワーティン（市民）革命が世界各地で起きていると最初に申しましたが、「ムワーティン」も、「ワタンに踏ん張って立つ人」＝市民なのですね。市民決起の連帯意識が共有され公共化されているような場がワタンであり、場に漲るエネルギーがワタニーヤなのだと、考えます。

似たような言葉として、「ビラード（bilād）」というのもあります（「バラド」の複数形）。これは市町村みたいな感じの場所で、そこに帰属しているという感じを伴う。ワタンに付着する「自分はそこに立つ」という主体性の意識とは異なり、おのずと自分はそこに「納まっている」という感覚が付きまとう。しかし、「安住できる場」感覚を煮詰めれば、主体性を盛り込むこともできるでしょう。さらに「トゥラーブ」という言葉もあって、これは地面とか土地、天地の「地」、物質的・物理的・風土的な観察対象というような客観性を帯びた場や環境です。

▸白色の大地

さきに触れたマー・アルアイナインは、モーリタニア、西サハラ、モロッコ、アルジェリア南西部、マリ北部などを含めた場所を「トゥラーブ・アル-ベイダーン（白色の大

地）」と表現しました。「ビラード・アル-ベイダーン」というと白人の国みたいなことになりかねないですが、アイナインの考えるワタンのトゥラーブ・アル-ベイダーンは、太陽光で白く見えてしまうサハラの土地の景観を如実に感じさせます。この場合は、トゥラーブにも主体性を宿らせることが可能になりました。

▸ハーッジ・オマルのジハード

ハーッジ・オマル・トァルの場合は、モーリタニア、西サハラ、モロッコ南部、セネガル、ガンビア、ギニア、マリ、ニジェル、ナイジェリア、こういうもろもろの区域を全部ひっくるめたワタンというものを考えていたのではないか。

▸ 「ワタン」を地球化する方途

ベルベル世界にとって、ことに西サハラのサハラウィたちにとっての現在的課題として、ワタンというものをこれからどういうふうに新たに獲得していくべきなのか。スペインによって、そしてそこにフランスやらドイツやらいろいろの勢力も絡んで、結果としてつくりだされた植民地時代の境界線で囲まれてできた西サハラではなく、自分たちで実現し獲得するワタンとはいかなるものか。国連が指定したやり方で登録し投票する人たちのワタンでなく、植民地が残した地図上の形をお仕着せとして受け継ぐワタンでもなく、です。そこで、ベルベルが自ら発展させてきた多様性の現実というものを考える必要がある。

それから、モロッコの社会と国家の変革のために、モロッコの中にもいる同胞との関係の結び方も積極的に考えないわけにはいかないだろう。また、「サフラワ（サハラウィであること）」に基づくワタンを追求していくと、連帯のネットワークが拡大してグローバル次元でのワタンが現実性をもって浮上して来ることにもなるだろう。こういう課題空間で、今日、我々は西サハラのことを考えている。西サハラの人たちは我々をも巻き込んで、彼ら自身のワタンを連帯的に、また拡充的に創り出そうとしつつある。それを応援しようと参画する我々も、自覚・無自覚半ばしつつ自らのワタンを拡充していると感じるのです。そういうところで、モロッコも西サハラも変わらなければならないし、モロッコもアルジェリアも変わらなければならない。

C］ モロッコの変革、アルジェリアの変革、世界の変革へのヒント

■1　モロッコに押し寄せる「列強」の取引とその係累の連帯責任

急ぎ足で要点だけお話するため、レジュメ資料から関心ある項目はご自身で調べてみてください。世界規模の連繋・交錯のもとで植民地支配国サイドの責任また連帯責任は、非常に大きい。西サハラの場合、漁業利権に加え、硝石やリン鉱石（鉱床発見は 1947 年）などの資源が、1950 年代の住民抵抗に対するスペイン・フランス両軍共同の残虐な弾圧作戦の引き金となった。

■2　モロッコ「鉛の時代」と「公正和解委員会」

ハサン 2 世の在位期間（1961～99 年）は「鉛の年月」と呼ばれ、政治弾圧が荒れ狂い、アトラス山中のタズママルト政治囚監獄はその象徴。2004 年「公正和解委員会」の設置も必要となる。政治抑圧がことさらリーフ地方と西サハラへの重圧だったことに注目が必要。

■3　二つのヒラークの意味へ[砂の戦争(モロッコ・アルジェリア戦争、1963.9～64.2)]

1962 年アルジェリア独立とともに、その直後、1963 年から 64 年にかけて、モロッコ・アルジェリア戦争[27]が発火しました。

地図をご覧いただけば分かりますが、アルジェリアの国土は南西の方角に異常に張り出す形状をしています。それは、19 世紀にフランスがアルジェリアを征服し内国植民地化する過程で、西アフリカを睨んだ戦略から、アルジェリアの領域と境界線をその南・西部に関しては一方的に決めることを許す世にも不思議な条約をモロッコに押付けました。1845 年のララ・マグニア条約がそれで、「無水の地帯では境界線は無意味」という理由です。しかも 1912 年モロッコはフランスの保護国となった。石油・鉄・マンガンなどの地下資源も発見されてくる。モロッコの独立を見越し 1952 年フランスはティンドゥーフとベシャールをアルジェリアに編入します。アルジェリア独立とともに砂の戦争が起きるのは必然でした。

モロッコ・アルジェリア戦争はエジプトやキューバの介入という国際化の様相も呈したが、フランス植民地主義のしつらえた境界線はそのまま、モロッコの変更要求は立ち消えに終った。1975 年西サハラの人びとは、モロッコ国王の号令で開始された「緑の

---

[27] 「砂の戦争」とも呼ばれる。1963 年、アルジェリア領のティンドゥーフ県およびビシャール県をモロッコが自国の領土と主張したことで勃発した。

行進」[28]という入植運動、武力攻撃・迫害を逃れて、アルジェリアに避難しティンドゥーフが難民の集結点となった。

■3′西サハラとリーフ　二つのヒラーク[29]

でも、モロッコでは 20 世紀初めに、もうすでにリーフというモロッコ北東部の地中海寄り地域で、リーフ共和国の独立宣言ということも行われますし（これはアブドルカリーム[30]の運動です）、そして、2016 年の秋から始まり翌年まで延々とやったモロッコのリーフの抗議運動の問題[31]だとか、2019 年から 20 年にかけてアルジェリアでは、延々とブーテフリカ大統領の 5 選目の大統領候補をやめさせる、そしてブーテフリカの一党を追放するという、アルジェリア革命[32]も起こってきているわけですね。

西サハラの人々の運命が切り拓かれるためには、そういう周りの国々が変わらなければならない。直接的にはまず、モロッコが変わらなければならない。その場合にリーフの運動とサハラウィの運動とがどういうふうに繋がりあうのか。これが問われたのが 1950 年代のモロッコ解放軍で、そのリーダーがベン・バルカです。結果的に 50 年代にうまく進まぬまま、60 年代に入って 65 年に消されてしまう。それはベン・バルカ個人の問題ではなく、モロッコの幕府体制を維新する、そういうサハラウィとリーフィー（リーフ人）の連帯した闘いの芽が、結局、摘まれてしまった。そして、それぞれがバラバラに闘っているという状況、これが西サハラの運動の今、これからどうする、というところで問われているのではないでしょうか。

---

[28] 1975 年 11 月、モロッコ政府によって調整された戦略的大規模デモンストレーション。これによってスペインは、モロッコとの係争地域西サハラの割譲を余儀なくされた。

[29] ヒラーク hirāk とは抗議・抵抗運動。

[30] スペイン保護領モロッコの反乱指導者。第三次リーフ戦争の中心人物であり、リーフ共和国の初代大統領である。

[31] モロッコ北部のリーフ地方で、国家機構の腐敗、失業などに反対する若者の抗議デモが広がった。https://www.meij.or.jp/kawara/2017_043.html

[32] 1999 年に就任したブーテフリカ大統領が 2019 年 2 月に第 5 期を目指すと発表したのに対して市民の激しいデモが始まり、4 月にブーテフリカ氏は辞任に追い込まれた。民衆のデモでブーテフリカ大統領が辞任したことは、「革命」と呼ぶこともできよう。
https://webronza.asahi.com/politics/articles/2019112000005.html

D］ 日本社会にとっての西サハラ

以上述べてきたことを、日本でわたしたちがいろいろ勉強し、議論したり発言したりするところで、考えてみれば、モロッコという国は困ったことだとか言ったりしても、その背後にある旧植民地領有諸国（旧植民地主義どころでなく、現在もなお必死で新々植民地主義の策謀を模索して動いている米・欧の国々）やポストコロニアル植民地主義の生き残りに賭けるイスラエルをも含めた、死に物狂いの末期的旧世界秩序を維持する勢力の総体と向き合う西サハラの人々の問題として考えなければならないとすると、どうしても今日最初に言ったように、日本の国というものは一体どういう関わり方になっているかについて責任もって答えなくてはならなくなるのです。自分事を他人事として語っていられるのか。そこで、琉球の問題、アイヌモシリの問題、在日コリアンの問題、等々に、自分はどう応えているかが問われる。このことと西サハラ問題を考えることとは、どのように一体化できるか。西サハラの人々との真実の一体化した共闘を求めたい。そういうことがなければ、無責任な評論家でしかない。自分の足元、自分のワタンの選び分けもできていないのではないかということを反省させられるのです。

日本でいろいろ関係する研究者がいろいろなお仕事をしている。それをこの空いているところに、ちょうどいっぱいになるような格好で入れ込みました。研究書ばかりでは必ずしもない形になっていますが、こういうのを選んでまた見ていただければと思いますし、それから、西サハラ友の会はこういう日本で関係が最も深い研究者にもっと働きかけて、西サハラの問題の研究はどうなっていきますか、どうしますか、どうしたらいいでしょうか、と問いかけていただいたり、そしてまたその人々の研究の進み具合からも学んでいくという、こういうつながりを広げ、固めていただいたらありがたいと思います。

いささか長く話しすぎました。すみません。終わります。

講演録

西サハラの世界史的位置を考える——トランプの置土産を眺めつつ

作成：ワタン研究プロジェクト
著者：板垣雄三
編集：岡真理／プロジェクト・ワタン事務局編集部
発行：2023 年 1 月 18 日
連絡先：プロジェクト・ワタン事務局
projectwatan3@gmail.com
http://www.projectwatan.jp/

©Yuzo ITAGAKI, 2023